

干拓前の潟、

子どもの頃の思い出

文・小西 一三
絵・小西 由紀子

天 王の京谷國夫さん(88)の自宅裏は、現在は船着場として整備されていますが、干拓前は葦原で、その所々に潟船が係留されていたといいます。定年後、実家に帰ってきた京谷さんに、子どもの頃の話をお聞きしました。

昭和30年代は、この一帯も子どもが多くて賑やかだったな。

じ いさんも親父も潟の漁師で、田んぼは2、3枚しかなかった。船は家のすぐ近く、歩いてすぐの場所にあった。当時、家の近くは葦がびっしりおがって、船を入れる場所だけは葦を刈って船着場にしていた。

我々団塊の世代は人数も多く、この地区の同い年だけで約70人だった。春から秋にかけては、もちろん潟が遊び場。田植えが終わると潟に入る連中もけっこういた。夏になればほとんど全員が潟で遊んだ。天王二帯は遠浅で、子どもたちが水遊びをしても深みや危ない場所はなかった。たまにどんどん沖の方まで歩いて深みまで行きそうになれば、一緒に遊んでいた上級生が注意して連れ戻す。下級生も上級生になれば、かつて先輩にもらったように年下の子どもの面倒をみたもんだよ。

モグがおがっていたので、水草による浄化作用とでもいうのか、水はすごくきれいだった。大きくなってから塩口の連中と話をしている分かったことだけど、ここ天王と塩口では水深がかなり違い、あちらは深くてモクもけっこう長かったとか。住んでる魚の種類も違っていたようだ。

私は5人兄弟の長男だったので、子どもの頃はよく親父の船に乗って



弟の丸で漁の京谷さんは今も潟を遊んでいる

ここはかなり遠くまで浅かったから子どもたちのいい遊び場になっていた



船越方面を指さす
京谷國夫さん

潟に出た。大した手伝いはできなかったけど、少しは役にたったかな。雨や雪が降って天候の悪い時もあつたけど、そんな時、親父は私を雨や雪の当たらない場所に入れてくれた。あとで「風が出た時は恐ろしかったか？」とよく聞かれたけど、親父を信じていたので恐ろしいと思ったことは一度もなかった。

高校を出て气象台に就職。東北各地に勤務し、定年後に帰ってきたけど、潟の漁師を取り巻く環境も大きく変わったな。「どっぴぎ」でも、つくだ煮屋さんが魚の買入れを制限しているものだから、漁師の側も自主的に水揚げを制限しなければならなくなった。腕のいい漁師が実力を発揮することができなくなったということ。管理された漁業になってきたということだ。これはさみしいな。